

二〇二二年度 田園調布学園大学

全学部全学科専攻 共通

国語 入学試験問題

一般選抜（個別試験型） A日程

受験番号				

（注意）

- 一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
- 二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
- 三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
- 四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
- 五、試験時間は六〇分です。

氏名

(一) 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

私が親のうちを出て、ひとりでアパート住まいをはじめたのは、たしか三十三歳のときでした。勤めていた出版社をやめ、テレビやラジオのaキヤクホンを書きはじめていた頃です。局から電話がかかり、スジの説明をするとき、電話は茶の間にあるので、関係とかキス、妊娠などいう単語の発音が家族の手前、とてもきまりが悪く、一日も早くうちを出て独立したいと思っていましたから、父と言い争いをした形で家出が出来たときは、正直いつとても A のを覚えています。

貯金をはたいてアパートを借り、家具をととのえて入ってみて、私はドキンとすることになりました。

私は急激にお行儀が悪くなっているのです。ソーセージをいためて、フライパンの中から食べていました。小鍋で煮たひとり分の煮物を鍋のまま食卓に出して、小井にとりわけ箸をつけていました。

風呂から上って、下着だけつけたところへ電話が鳴り、姿が見えないのをいいことに、そのままでの形で電話に出て、更に電話を切ったあと、熱い、汗を出してからというのをbコウジツに、下着姿で部屋の中を歩き廻り、ついでに小さな用を足していました。

坐る形も行儀が悪くなっているのが自分で判りました。立ち居振舞は、うちにいるときにくらべて、あきらかに居汚なくなっていました。

行儀には人一倍にうるさい父の目がなくなつて、家族の視線がなくなつて、私はいつぺんに①タガがゆるんでしまったのです。

自由をcマンキツしながら、これは大変だぞ、大変なことになるぞ、と思いました。

「転がる石はどこまでも」。こういうことわざがあるそうです。

ローリング・ストーンズというとかっこいいのですが、とても恐ろしい意味があります。いったん、セキを切ったら水がドウツと流れ出し、一度転げ落ちたら、水は、石は、どこまでも落ちてゆくのです。そして、それは、ある程度力をつけたら、もう人間の力では、とめようがなくなるのです。

お行儀も同じです。

フライパンから食べるソーセージは、次には買ってきたお菓子を袋から破いて、小皿にとりわけずに食べているでしょう。海苔の佃煮の小びんに直箸を突っこみ、次に箸を入れようとしたとき、中から白いご飯粒がのぞいたりするのです。

ぞつとしました。

これは、お行儀だけのことではないな、と思いました。

②精神の問題だ、と思ったのです。

私は、自分の中にこういう要素があることを知っていました。

B してはいけないことをしようとしてしまう癖です。

誰も見ていないと、ゴミを捨ててはいけないところで、紙クズをほうつてしまうのです。

車の運転免許をとることを途中でやめたのは、友人が車でdヒサンな事故死をしたこともあり

ますが、私の中に、人が見ていないとスピードを出す癖があるのを知ったからなのです。
自由は、いいものです。

ひとりで暮らすのは、すばらしいものです。
でも、とても恐ろしい、目に見えない落とし穴がポツカリと口をあけています。

それは、行儀の悪さと自堕落です。

自由と自堕落を、一緒にして、間違っているかたもいるのではないかと思われるくらい、これは裏表であり、③紙一重のところもありますのです。

「独りを慎しむ」

このことばを知ったのは、その頃でした。言葉としては、前から知っていたのですが、④自分が転がりかけた石だったので、はじめて知ったことばのように、心に沁みただけです。

誰が見ていなくても、独りでいても、慎しむべきものは慎まなくてはいけないのです。

ああ、あんなことを言ってしまった、してしまいました。

誰も見ていなかった、誰もが気がつきはしなかったけれど、何と恥ずかしいことをしたのか。闇の中でひとり顔をあからめる気持を失くしたら、どんなにいいドレスを着て教養があっても、人間としては失格でしょう。

「独りを慎しむ」、これは、人様に対していつているものではありません。

独立して十七年になりながら、いまだになかなか実行出来ないでいる自分に向って、意見していることばなのです。

向田邦子『男どき女どき―独りを慎しむ―』新潮社

【文章Ⅱ】

ふつうタケノコは、「採る」ものであって「狩る」ものではない。しかし竹藪が広く、食べきれない分を宅配便で知人に送ってもなお出てくる余分については、もう「狩る」しかない。うちでは、「やつつける」とも言っている。柄の長い鎌や、長靴を履いた足そのものが武器になる。エイヤツと、切ったり蹴ったりして廻るのである。

竹にまで育ってしまうと、これを切る手間は狩る場合の何十倍にもなる。竹はe地下茎をどこまでも伸ばし、竹藪じたいが常に広がるようになっているから、放っておくと庭も境内もどんどん竹だらけになってしまう。だから、狩るのである。

それにしてもいろんな親子がある。竹と筍、露とふきのとう、スギナと土筆。しかし竹ほどすぐ、親そっくりになるものも珍しいかもしれない。

草食動物などは、いつ肉食獣にやられるかわからないから、生まれ落ちると大抵すぐに立ち上がる。そんな自立の早さがタケノコにも感じられる。しかし考えてみれば、彼らは全部地下茎で繋がっているから、親からの栄養をずっともらい続けている。実は自立なんて、していないのである。

しかし切られると、途端に自立しようとする。自ら独り立ちしようとする意志がタケノコに芽生え、それがアクと言われるものになる。だから切られて栄養補給されない時間が長いほど、あるいは光を受けて竹になる意志が強くなるほどに、アクも強くなる。つまり⑤アクが強いということは、大人に近づいた証拠なのだと思う。

子供のアクが強くなることは、⑥親にとつて複雑な気分を伴う事態だ。アクが強くなったのに一人前扱いしないと反抗期になる。これは、もう根を切り離しても生きていけるといことだか

ら、昔はその時期に元服という儀式をしたのだろう。

草食動物の自立の早さに比べると、ヒトの自立は極めて遅い。一人で歩けるまでに一年もかかるのだから世話がやける。この、独り立ちまでの期間に定数を掛けるとその生物の寿命が算出できるといふ学者もいる。ヒトの C が遅いのは、D も長いだから当然だが、ここで申し上げている自立とは、生物としてではなく社会的な意味である。そうだとすれば、ヒトが自立するのはいったいいつなのだろう。

学校では、最近よく「自立」という言葉を目にする。できるだけ自主的に考えて判断し、自立した暮らしを心がけることは大切だろう。親離れは、たいていの動物において親の側の意志でなされる。その下準備をしておくということだ。

しかし日本には、⑦これとは正反対の考え方もある。子供の健全な成長を祈って五月に柏餅を食べるのは、柏の葉が、次の葉が出るまで枯れても落ちないその「後見ぶり」が見事だから、というのだが、この柏を目出度いと見る習慣は、どう考えたらいいのだろう。

なんだか日本には、竹のない西欧で考えられた「自立」とは違った在り方があるような気がしてきた。竹の地下茎や柏の後見を含みこんだ関係性のなかの生き方が、あるのではないだろうか。

タケノコ狩りなどをしていると、変なことを考えるものだ。私のアクは、かなり強いとは思いますが、私は一体自立しているのかどうか、未だに自信がない。「お陰さま」とか「ご縁」を大事に考えていると、自立という言葉がよく分からなくなるのである。

玄侑宗久『サンショウウオの明るい禅―タケノコ狩りと自立について―』文藝春秋 2009年

問一 二重傍線部 a と e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部①「タガがゆるんで」、③「紙一重」、⑤「アクが強い」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①タガがゆるんで

③紙一重

ア	まったく差がない
イ	大いに差がある
ウ	本質は同じ
エ	わずかな差がある
オ	比較できない

ア 毒を含んでいる
イ 悪さがはなはだしい
ウ 独特のどぎつさがある
エ 辛辣な物言いになる
オ 理解力に富む

問三 空欄Aに入る最も適当な語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	いらだった	イ	いきいきした	ウ	困惑した	エ	寂しかった
オ	嬉しかった						

問四 傍線部②「精神の問題だ、と思った」とはどのようなことか。五〇字以内で説明しなさい（句読点や記号を含む）。

(下書き用)

[illegible]

問五 空欄Bに入る最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本能のままに、
- イ 人の命にかかわらないなら、
- ウ 親に反抗するために、
- エ 人が見ていないと、
- オ 自由を愛するあまり、

問六 傍線部④「自分が転がりかけた石だったので、はじめて知ったことばのように、心に沁み」たとあるが、この説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 独り暮らしという他者の目のない生活のなかでだらしなくなってきたときだったので、今まで耳にしたことはあった「独りを慎しむ」という言葉の真意が、実感をもって理解できたということ。

- イ 独り暮らしという自由を得て自分なりのいい生活ができるようになってきたときだったので、今までは表面上の理解にとどまっていた、言葉の深奥に含まれている重要性に気づいたということ。

- ウ 独り暮らしという親元を離れた生活に入った矢先だったので、「ローリング・ストーンズ」の危険性や「独りを慎しむ」という言葉の大切さが、自分の価値観としてようやく感得できたということ。

- エ 独り暮らしという、お行儀も精神もどこまでも堕ちていくことができる生活に入っすぐ、自分を律してくれる言葉と出会うことで、「独り」や「慎しむ」の本質的意味を大いに悟ることができたということ。

- オ 独り暮らしという、今までとまったく異なる環境に身を置いたときに聞くことで、たとえ言い古された表現であっても、はじめて聞くような新鮮さがあることに気づいたということ。

問七 傍線部⑥「親にとって複雑な気分を伴う事態」とあるが、「複雑な気分」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子供が親に反抗する時期になったことを喜ぶと同時に、その反抗を抑えなくてはいいけないというジレンマ。

イ 子供が完全には独り立ちできていない状態にもかかわらず、一人前扱いをしないといけないという割り切れなさ。

ウ 昔は元服という儀式を行ったが、儀式がなくなった今、自分たちで子供の自立の時期を判断しなくてはいけないという難しさ。

エ 自立するにはまだ早いと思いつつ、反抗する意志を示した子供を理解しなくてはいいけないという焦り。

オ 親にとって子供はいくつになっても子供なのに、自立をしたら親元という根を切り離さないといけない寂しさ。

問八 空欄C、Dに入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|---|------|----|---|------|
| ア | C | 自立 | ―― | D | 定数 |
| イ | C | 死 | ―― | D | 独り立ち |
| ウ | C | 独り立ち | ―― | D | 寿命 |
| エ | C | 判断 | ―― | D | 下準備 |
| オ | C | 反抗期 | ―― | D | 社会性 |

問九 傍線部⑦「これとは正反対の考え方」とあるが、どのような考え方か。「これ」と「正反対の考え方」が具体的にわかるよう、六〇字以内で説明しなさい。(句読点や記号を含む)。

(下書き用)

問十 次に掲げるのは、【文章Ⅰ】と、【文章Ⅱ】の内容について五人の生徒が話し合っている場面である。その内容が、本文に照らして適当なものには○を、適当でないものには×を書きなさい。

ア 生徒A ―― 【文章Ⅰ】は、実体験を通して感じた独り暮らしの落とし穴と、それに気づいた筆者の自分の行動に対する反省めいた意見が書かれていたけれど、【文章Ⅱ】は、タケノコ狩り体験から、植物や動物と比較対照したヒトの親と子の関係や自立について、日本的な在り方の可能性について書かれているわね。

イ 生徒B ―― 自立とは何かという共通のテーマを、日本と西欧、実話と虚構のように対照的に語っていて興味深かったな。特に【文章Ⅰ】に出て来た「独りを慎しむ」とか、【文章Ⅱ】の「お陰さま」という言葉には、自分よりも他者の存在の大切さが感じられて長年その言葉を使ってきた人にしか判りえない重さがあったね。

ウ 生徒C ―― 【文章Ⅱ】では、ヒトが社会的意味において自立するのは、タケノコに譬えるなら根から切り離されたときという発想は面白かったな。親元から離れない限り、たとえ大人になろうという意思が強くあったとしても本当の意味で自立したとは言えないという筆者の考えに大きくうなずいてしまったよ。

エ 生徒D ―― 【文章Ⅰ】では、個室や携帯電話がなかった時代の親の存在の煩わしさが描かれていたね。いまは個食化も進んでいるし、お菓子や瓶詰が小分けになっていたり、パッケージのまま食べられるようになっていたり工夫されているけれど、「独りを慎しむ」ことを余儀なくされてきた世代の意識の高さがあったからこそなのかと改めて感じたわ。

オ 生徒E ―― 他人の目がないと行儀が悪くなるし、それだけでなく精神も堕ちていくという【文章Ⅰ】には、私もドキッとさせられたわ。他人がいるところで出来ないことは一人のときでもしてはいけないということよね。【文章Ⅱ】の西欧的自立の発想とは違う、竹や柏にみられるような日本的な関係性という発想も新鮮だったよね。ヒトが自立するのはいつかという問いかけに、筆者自身が答えていないところもこの問題の本質かもしれない。

(二) 次の文章は、久米正雄の小説「流行火事」の一節である。安積^{あきか}近郊^{ひでり}一帯に冬^{ふゆ}早^{はや}が続^つき、村々に火事が流行していた。桑野村だけは免れていたが、十二月十七日に桑野村にも大火があるという噂が立った。それは三等郵便局員で雇員に使われている平吉が、流した噂であった。村の家々では、家財を片付け始め、大火に備えていった。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

雇員の平吉は、自炊している裏の六畳から出て、何気なしに表ての局を覗^{のぞ}いた。するといきなり局長にこう云われた。

「やあ平吉。いよいよ今夜になったな。道具はもう片附けたかい。」

「いえまだです。」 こう答えて何故か彼は赤面した。しかしすぐそのあとから意地の悪い

快味^{たず}₁が、頭をもたげた。彼は訊ねた。

「一体火事はほんとに今夜あるんでしょうか。」

「あるとも。あると思わなくちゃならない。」これが力を籠めた主人^{あるじ}の答えであった。

「では私も片附けるとしましょうか。」と云いながら彼は局を出た。けれども勿論、真直ぐに自分の室^{へや}へは帰らなかった。彼はぶらぶら村の友人でも訪問して歩こうという気で、街道の方へ出た。するといつもは深閑としている家々が、色々な錯綜した音を立てて騒いでいる。街道の両側には、処々黒光りのする戸棚などが運び出されてある。彼は少しく吃驚^{びっくり}して立佇^{たちどま}った。

そこへ向うから油屋のおひさちゃんが、いつもの通り aサイ^{サイ}ホウ^{ホウ}の包^{つつみ}をかかえて通りかかった。

「あら平吉さん。ここにいたの。家は片附いて。」円顔^{まるがお}を首の上にかしげて彼女は云った。

「いやまだだ。」

「そう。私今お bシ^シヨウ^{ヨウ}ウ^ウさん所^{しよ}を早くお暇^{いしま}して、帰って来たのよ。家が済んだらすぐあなたの処へ手伝いに行くから、それまで待つて頂戴。よくって。」もう一度彼女は首をかしげた。

「一体ほんとに火事があるのかねえ。」彼はこの信頼すべき自分の恋人に訊ねたくなった。

「それやあるわ。だって町でもあったんですもの。」これが力を籠めた女の言葉だった。

平吉はおひさちゃんと別れてまた歩き出した。そして村端^{むらはず}れまで来ると、その自然木の門を入って、村長の家を訪れた。

村長の息子は、今年廿七^{注2}になる彼と同年輩の青年で、去年早稲田の政治科を出た村の秀才であった。行く行くはこの地方から代議士になるつもりで、今から準備を怠らなかった。平吉はこの人なら、新時代の教育を受けた青年だから、まさかに噂を信じまいと思った。そして信じないとすれば、無論暇だろうから、大いに天下の形勢でも雑談しようと思ったのだ。

所が彼が「失敬。」と云って、いつも通りなれている庭から息子の書斎へ通ると、

「いやあ。君はもう済んだのかい。僕は今忙せわしい最中だ。」と云いながら、息子は、『楞堂論集』と『大隈伯演説集』^{注3}とを重ねて、A 塵を払った。

「ほんとに火事はあるんだろうか。」彼はそこに立ったまま呆然ぼうぜんと独語に似た質問を發した。この時の彼の心にはもう皮肉な微笑は消えていた。そしてこの自分の言葉が自分以上の何物かが自分を通じて問うているかのように響いた。

「それあるさ。なくとも、あると思えば間違いないからな。」これが友人の力をこめた答えであつた。

「じゃ失敬。」と云いながら平吉はまた B そこを出て行つた。そして更に新らしい遊び相手を物色しなければならなかつた。彼は寺へ行こうと思つた。あの学問のある和尚おしょうなら仏力はたのんでも、そんな迷信を持つてはいはしないだろう。そしたら二人で悠々と碁でも囲もうと考へた。和尚はいつもの通り、方丈^{注4}に①悠然と坐つていた。平吉はそのゆつたりした腹部と、顔に浮んだ歡迎の微笑とを見ると、ひどく頼もしげに感じた。

「やあ平吉さんか。よく来なすつた。家うちがもうちゃんと片附いたんで、安心立 C してやつて来なすつたのだな。」

「どう致しまして。」平吉は頭を搔きながら答へた。そして和尚の周囲を見廻した。

「だが此処ここも片附いてはいませんな。」

「ああ誰も片づけ手が来てくれないから、放つて置いた。この本堂ももういい加減古くなつたから、一炬いつくに附ついた^{注5}方が増ましな位いだて。己わしは先刻さつぎから再建の胸算用をしている。」

「へへえ。」平吉は呆れて和尚の顔を見つめた。するとその拍子に我にもあらず、問いを發したくなつた。

「ほんとに火事があるんでしょうか。」

「こう末世が近づいては、あると見るが至当だな。」それが四度目の平吉の聞いた答えであつた。

「一体噂はどこから出たんでしょう。」平吉は②勇を鼓して訊ねた。

「出所がわからぬからな怖いて。」

「もし誰かがいい加減に云いふらしたとしたら、どうでしょう。」

「天は人をしてこれを云わしむ。その人がいい加減で云つた事でも、真実ほんとうになることはいくらもある。」

平吉は真青になつて、「御免」と云いながら寺を駆け出した。

一、二時間過ぎてからおひさちゃんが親の目をぬすんで、平吉の家へ来てみると、③平吉は僅かな身廻りの道具と、自炊用具とを一生懸命に片づけていた。

太陽が赤く沈んで、愈々いよいよ待ちに待つた夜が来た。すると今まで急にやんでいた風が、こうこう

と北から吹き上げて来た。

村の消防隊に属する若い衆は皆唧筒小屋に集まった。厚し半纏^{あつばんてん}注6をまとうた逞ましい人たちが、唧筒の傍に整然と蹲^{うすく}まっている。去年の春の消防演習で、県から下賜された金ばれん^{注7}が、夜目にも燦^{さん}注8と光って見えた。

灯^{ともしび}という灯、火という火を悉く絶やした一村の人々は、爛々たる星空の下で、吹き渡る風の音を聞きながら、不安と沍寒^{ごかん}とにふるえていた。男たちは何するとなく、暗^{やみ}の中をcウオウサオウして、互いに短かい叫び声で語り合った。

夜は風の音の断続と共に深み渡った。しかもそれは何事もなく過ぎ去りつつあった。

村の人達もいつとはなしに、唧筒小屋の周囲に集って来た。火の気のない家の暗闇の中に慄^{ふる}えているより、多人数^{たにんず}の中に入り交って、逞しい消防隊の準備を眺めているのが、いくらか各人の心に頼もしく感ぜられるのだった。それでも寒さは遠慮なく各々の肌を刺した。

夜は更けて、星が空に凍りついた。各々が踏んでいる大地はとうの昔堅くなっていた。

「ああ火が焚きたいなあ。」誰かが暗の中で呻^{うな}った。皆は D 干からびた笑声を挙げた。そして、各々自分の心持を云いあてられた人のように、顔を見合せて苦笑した。

「そんな事云っちゃいかん。」消防の小頭^{こがしら}が、叱るというより願うような顔で云った。

彼もまた切にd焚火^{こわね}を欲しているのが、その声音でもわかった。

ふいに、今来た人が暗の中からぱつと光るものを出して、消防夫を照らした。それは村長の息子だった。

「燈火なんぞ持つて歩いて危ないじゃないか。」消防の小頭が今度は怒り声を立てた。

「なあにこれあ懐中電氣だ。火なんぞちつとも出やしない。」息子はこう答えて、なおも二、三回ぱつとそこらを照らして見せた。仄赤^{ほのあか}いその光りを浴びて、不安に立ちすくんでいる群集や、蹲まっている消防隊の人々の、青白い顔がはつきりと見えた。人々はひどく懐しいものを見るような思いで、その光りの源を見守っていた。

そしてその照らし出された小ささまざまの顔の後ろに、際立つて青白い平吉の顔が、気のぬけたように浮いていた。

「もつとやれやれ。」村長の息子が電燈を懐ろへ蔵^しまった時、群集の中から噎れた声で誰れかが叫んだ。それは村人の誰彼とも見当のつかない声だった。これが「輿論」^{注9}の声だなどと息子

は思った。

するとそれに応じて、「やれ、やれ。」と云う、村人の数多なる声^{あまた}が起った。

息子は求めらるるもののよく浮べる微笑を以て、また電燈の光りをそここに向けた。その光りの届く末には、洒^きれ立った枯木が、白く灰を浴びたように見えた。

一人の消防夫がふと立つて来て、電燈の光りの前へ手を出した。それはあだかも注　焚火にあたるかの如き態度だった。この冗談は人々を一時悦ばせた。④しかし各々は心から笑えなかった。

「焚火が欲しい。」またさっきの何者とも知れぬ声が叫んだ。誰もかもそう思った。小頭はもう怒れなかった。しかし人々はまだ焚火を恋いながら、火の気のない暗の中に⑤甘んじてふるえていなければならなかった。――

そうこうする中に東^{うち}の空で星が流れて、永い冬の夜も　E　明けかかった。風も物に吞まれたように　F　止んでしまった。

「もう大丈夫だ。」と人々は、暁の光りの中で互いの吐く息の白いのを見やりながら、心中で独語した。しかしその安心と同時に、漠然とした不満が各々の心に在った。これだけの用意と、これだけの緊張を以て待ち設けた夜が、何事もなく過ぎて行くのだ。――

「畜生、何の事だい。」⑥人々の心には、ある憤激に似た狂暴が募って来た。

「どうだい。もう焚火をしようじゃねえか。」一人が明^{あや}かに誰かにあてつけるような口調で剣食^{けんどん}に云った。彼は何ものとも知れぬ、あるものに漠然と憤っているのだった。

「そうだ。やれやれ。昨夜^{ゆうべ}からの分を今取りかえすがいい。どんどん焚いちまえ。」他の声々がまた剣食に応じた。

もうそれを止める者は無かった。よしあつたにしても、四方からの怒罵^{どば}が、そんな言葉をすっかり打消してしまつたろうと思われた。

忽ち^{たちま}にして燃料は唧筒小屋の前に山積せられた。薪、藁、炭俵。――それらに初めて火が点

ぜられた時、人々は何とも云えない喚呼^{かんこ}の声を挙げた。そしてその声が、霜錆びのした朝雲に響き失せて行く時、その人の輪の間からぬるぬると太い煙が騰^{あが}りそめた。昨夜から絶えて見ぬ焰が、鼻の先きだけは赤いけれども、その他の処は青白く興奮した人々の顔を照らした。

「どんどんくべろ。うんと焚け。家でもなんでも燃やしてしまえ。」誰かがまた叫んだ。

するとその時である！　今まで声を潜^いめていた風が、何処^{いずこ}ともなく空を奔^{はし}って、竜巻のように火の周囲を吹き旋^{めく}った。火は長い焰の手を生きてるようにべらべらと伸ばして、忽ち唧筒小屋

を嘗めた。——ほんの一瞬時である。人々は呆然として、手を翳^{かざ}したままそれを見ていた。

唧筒小屋の焰は更に大きかった。そして後に云い伝えた話によると、その火の中から八羽の火喰^{ひくい}鳥^{どり}が飛び出して、八方に火屑を運んだのであった。やがてそこには明け切らぬ空の静寂^{うち}の中に、八本の火の柱が音もなく立昇った。それあだかも燻^{くん}色の銀板へ、赤い珊瑚^ほを鑄^はりつけたように動かなかった。

須臾^{しゅゆ}にして^注 村中が焦土と化したのは云うまでもない。しかし昨日からの準備は、村人から毫も重要な家財を火に奪^うわしめず、焼死した人は一人もなかった。そして村人の顔には G が表われているのだった。

久米正雄『流行火事』新潮社 1918年

注

1 心地よい感じ。

2 二十七

3 愕堂は、日本の政治家尾崎行雄(1858 - 1954)の号。大隈伯は、日本の政治家大隈重信(1838 - 1922)。

4 寺の住職の居所。

5 いっぺんに焼くことにした。

6 厚くて丈夫な木綿の半纏。仕事着で使われる。

7 ばれんとは、纏^{まと}の周りに厚紙や革などを細長く裁ち、房のようにたれ下げた飾りのこと。

8 きらびやかなさま。

9 世論のこと。

10 「あたかも」に同じ。

11 短い時間で。しばしの間に。

問一 二重傍線部 a・e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部①「悠然と」、②「勇を鼓して」、⑤「甘んじて」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 悠然と

ア のんびりと暇そうに
イ 目を閉じて静かに
ウ ゆったりと落ち着いて
エ ひっそりと穏やかに
オ 厳かに雑念を払って

② 勇を鼓して

ア 勇気を奮い起こして
イ 勇敢なふりをして
ウ 勇壮な態度を見せようと
エ 勇み足になって
オ 勇猛果敢に攻めて

⑤ 甘んじて

ア 安易に身を委ねて
イ 不満に思うことなく
ウ 易々と受け入れて
エ 大人しく諦めて
オ 仕方なく我慢して

問三 空欄 A・B・D・E・F に入る最も適当なことを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア	白ら白らと	イ	どつと	ウ	ばたばたと
エ	ぶらぶらと	オ	くるくると	カ	くねくねと
				キ	はたと

問四 空欄 C に入る文字を漢字一字で答えなさい。

問五 平吉が、局長、おひさちゃん、村長の息子、和尚と火事の話をするにつれて、平吉の心情はどのように変化していったか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最初は、自分の出まかせに翻弄されているのを見て快感を得たが、皆が自分の言葉をまともに受けとり、火事に備える様子を不憫な思いがし始め、最終的には本当に火事が起きるのではないかと不安を抱くようになった。

イ 最初は、自分の悪戯が図に当たって満足感を覚えたが、皆が自分の言葉を信じて火事に備える様子を不安を感じ出し、最終的には自分の言ったことが本当になるのではないかと恐れを抱くようになった。

ウ 最初は、自分の思いつきがうまく運んで快楽を覚え、さらに皆が自分の出まかせを信じて火事に備える様子を嘲笑していたが、最終的には自分の言った通り火事が起こるのだと確信を抱くようになった。

エ 最初は、自分の策略が見込み通riになって喜びを感じたが、皆が自分の相手をせず忙しそうに火事に備える様子を不満を覚え出し、最終的には自分の言ったことが本当になるとよいと思うようになった。

オ 最初は、自分の悪戯心が予想以上に影響を与えて心地よさを覚えたが、皆が悪戯とも知らず火事に備える様子を恐縮し出し、最終的には火事が起こらないとまずいのではないかと心配するようになった。

問六

傍線部③「平吉は僅かな身廻りの道具と、自炊用具とを一生懸命に片づけていた」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 平吉は、迷信を持たず、常に悠々と構えている和尚を尊敬しており、その和尚が末世が近いので火事は起こると言ったから。

イ 平吉は恋人のおひさちゃんや新時代の教育を受けた村長の息子までもが火事に備えているのを見て、備えだけはしておこうと思ったから。

ウ 村の家々が家財を運び出し、局長も火事に備えており、和尚でさえも火事によって寺の再建を考えているのを知り、自分だけ火事に備えないのはよくないと思ったから。

エ 平吉は、天が平吉を使って火事が起こることを村人に知らせたのだと和尚に教えられて、火事が起こることは天命なのだと悟ったから。

オ 平吉は和尚の言葉を聞いて、自分は出まかせで言ったつもりでも、天が自分を通して火事が起こることを言わたのであり、火事は実際に起こりそうだと思ったから。

問七 傍線部④「しかし各々は心から笑えなかった」とあるが、それはなぜか。一〇〇字以内でその理由を説明しなさい（句読点や記号を含む）。

(下書き用)

[illegible]

問八 傍線部⑥「人々の心には、ある憤激に似た狂暴が募って来た」とあるが、その理由として不適當なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 火事が起こるといふ噂を信じてしまったことへの腹立ち
イ 火事に備えて、家財を運び出した手間や苦勞が無駄になったという思い
ウ 寒さのため懷中電氣の光でさえ暖かいと思つてしまった気持ち
エ 冬の夜の寒さの中、焚火にもあたれず、我慢した気持ち
オ 火事が起こるのではないかという不安と緊張を耐え忍んだ気持ち

問九 空欄 G に入る最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不思議なる満足のさま
イ 何とも言えぬ落胆のさま
ウ 喜びと悲しみの入り混じったさま
エ ただならぬ安堵のさま
オ 人智を超えた奇妙なさま

問十 本文の内容や表現についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「太陽が赤く沈んで」、懷中電氣の「仄赤いその光り」の赤は、火事の火の赤さに通じ、「青白い平吉の顔」、「青白く興奮した人々の顔」の青白さと対比的に用いて、色彩が自然の脅威と人間の無力さを象徴している。

イ 噂を信じ、火事に備えるために心身共に疲弊した人々が、火事が起こらなかったことに物足りなさや不満を感じ、自ら火事を起こす様を描くことで、人間の倒錯した欲望や一途に信じることの恐ろしさを表現している。

ウ 噂がどのように広まっていくのか、噂が真実になるためには何が必要かを、村で起きた火事というエピソードの中に描き、人間が噂を真実に変えていくメカニズムを分析的に描いている。

エ 火事が起こるといふ噂を流した平吉の心情と、噂を信じて行動する村人の心情を織り交ぜながら、平吉という個人の悪戯心から出た嘘が村人の集団心理によって真実になっていく様を描いている。

オ 出来心から火事の噂を流した平吉が、噂を信じて行動する村人の様子を見て、ほくそ笑んだり、不安になったり、呆然としたりする様を一人称で語りながら、村人に対する平吉の気持ちの変化を描いている。

(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

①卒業までに社会人としての基礎的な()を身に付けておきたい。

ア アピール イ スキル ウ テクノロジー エ ノウハウ

②この裏山に金塊が埋められていたことは()嘘ではないらしい。

ア あながち イ ひとお ウ まるで エ よかれあしかれ

③()お願いですが、何とぞよろしくお願いいたします。

ア えもいわれぬ イ 肩身が狭い ウ さしでがましい エ ふてぶてしい

④仮病という()手段を使っても明日は休みなさい。

ア 陰湿な イ 姑息な ウ 戦慄な エ 論外な

⑤明日の朝、何時ごろに()ますか。

ア ご出発いたし イ ご出発され ウ ご出発し エ ご出発になり

⑥新アルバムはデビュー曲の()では売れませんよ。

ア 二番煎じ イ 表裏一体 ウ 相乗効果 エ 忘れ形見

⑦江戸の職人芸の()を尽くした工芸品。

ア 手腕 イ 円熟 ウ 極致 エ 辛苦

⑧身に覚えはない。()のは迷惑だ。

ア 痛くもない腹を探られる イ 飼い犬に手を噛まれる
ウ 上手の手から水が漏れる エ 指をくわえて見る

⑨予想通りに事が運んで、彼は()の笑みを浮かべた。

ア 慈愛 イ 絶妙 ウ 本望 エ 満面

⑩都会の()を逃れて郊外に引っ越した。

ア 弊害 イ 喧騒 ウ 混沌 エ 単調